

序

木 村 毅

一 自由の鐘の余韻

もし永遠をもって対比すれば、百年の如きは一転瞬にすぎないが、しかしそれは觀念上の假定で、實際にその中に生きた実感から言うと、百年の寿を保つ人間は、絶無ではないにしても、あり得ぬほど稀で、おのれを尺度としてみれば、百年の月日はかなり長いものである。そこで歴史は、これを区切るに Century を以てし、それを祝う記念祭には Centenary という特殊の語が出来ている。世界史はこの間に、たとえば巨濤のうねりのような幾つかの事変が揺り上げられて来ずにはすまない。

現にアメリカでは独立記念二百年祭が盛大に行われた。フィラデルフィヤに響いた自由の鐘の響きは、ヨーロッパを直撃して、フランス革命を手始めに、パリコンミューンを中にはさむ幾多の大小革命を経由して、最後は遂にロシア大革命にまで波及し、それから東洋を舞台として中国革命に至るまで、今日の世界地図の色合はこれによってきまったと、史家トインビーは講演で述べている。

日本も元より、その一波一浪の中に揉みくちにされた。七百年の歴史をつんで比類なく長い我が国の封建制度も、三百年の平和という世界的レコードを作った幕府組織も、自由の鐘の余韻で、土台からぐらぐらと揺れ動いた。

土瓶の口から立ちのぼる湯気を動力として駆使して、汽車、汽船を動かせはじめた彼等は、余勢の及ぶところスエズ運河を切りひらき、アメリカ横断鉄道を通ずることによって、世界が三分の一に縮まったのだから、もう日本の鎖国も、攘夷も守れる筈がない。

そういう異変また異変、革命また革命をかさねた十九世紀が中葉を超えること、三、五年にしてアメリカ独立百年祭はおこなわれ、我が国では、それに先んじて、いわゆる明治維新の変革があった。これを象徴する挿話は多いが、しかし福沢諭吉が芝新銭座にもうけた慶応義塾の教室に、上野では彰義隊討伐の砲声の殷々として響いているのをよそめにして、ウェランドの「経済書」を講じたという話は、最も有名で且つ意義が深い。その中にあるジョイント・ストック・コンパニイの訳の暗示から、幼稚ながらその形をとって出発した丸善は、いうまでもなく日本株式会社の第一号で、その時の日本が最も熱切に要求していた泰西新知識の源泉なる洋書と、唐物のちに舶来品と呼ばれて子女の憧憬垂涎のまどだった雑貨と、それから医療機械との乏しい品とを店先に並べて、発足したのである。そのうち医療機械は、どうも店の他の品と肌の合わぬ所があるので、洋書と唐物の二本立て、という中にも洋書が表、唐物が裏の方針を堅持して、この一世紀を貫き通してきた。輸入元は、元来アメリカ知識の影響下に芽生えたのであり、時代がメリケン物として広範囲に、真向いの太平洋をわたってくる船から荷上げされる品々を好んで吸収していたので、自然、丸善の業態もアメリカが主流をなし、それと同文同種でいわゆる本家格なるイギリスが副流、これに続いてフランスとドイツが二支流として注ぎこみ、爾余の諸国は細流という形になったのは、全く自然なことである。

先ずアメリカとの文化関係を見れば、福沢が慶応三年に第二回の渡米をした時、輸入の端をひらいた諸種のアメリカ教科書が奔流の如く入りこみ、ほぼ明治二十年までは、官学も村塾もそれをまねたので、現にその流行書の一つで明治末年まで用いられたパーレーの万国史は、日本からの注文の多いのに驚いて、それを教科書の本文の中に記入している程である。

しかし元々、イギリスはアメリカの本家で、文化程度が一段と高く、それに、後に対馬海戦の世界的美談となった東郷平八郎がイギリスの兵学校に留学したのを始め、広くイギリスに範を取り、鉄道はイギリス資本と技師によって建設せられ、小説を読むことは高田早苗、坪内逍遙ら、東京大学開設当時の学生が、スコットやリットンの小説をあさることから広まったので、イギリス小説が濫觴をなした。たとえ文部省がイギリスは高級、洗練に過ぎて、わが国が模範とするには、少し進みすぎていると言って、アメリカ・ファーストの方針を取っても、しまいには米英の比率が、ややもすれば逆転する程の形態を招致した。

政治外交面で言っても、十年の滞留でフランスが身にしみついている元老西園寺でさえ、団扇をもって譬え話にし、主軸の柄を握って世界をおおいでいるのは英米であるから、我が国は英米追随外交でいい。誤っても煽がれる方に廻ってはならぬと戒めていたのが、国是となっていたから、その反映でもあった。

しかしフランスは、なにしろブルボン王朝以来の、世界文化の中心である。パリは世界の女王で、Paris, Reine du mondeという流行歌はひろく我が国の子女も歌った。ナポレオン三世は、十五代將軍徳川慶喜にナポレオン服一式を贈ってきた歴史が象徴する如く、維新前に幕府を懐柔しようとし、我が兵制もフランス式を採用した。明治

になつては又陸軍が最初ナポレオン崇拜だったから、兵卒の唱える「氣をつけ、右向け右」もいっさいフランス語で行われた。明治最初の小説の翻訳もフランス物だから、この影響は根強い。

ドイツは、外交的に後手をとったが、なにしろ明治天皇すらアー・ベエ・ツエのドイツ語を習い、その政治学には、木戸孝允の発言で、ドイツ書に拠られた。それに医学はドイツに学ぶべき事を、アメリカ人で明治政府の顧問のフルベツキが進言している。音楽、哲学、科学、そして普仏戦争以後は、我が陸軍は従来のフランス制をドイツに切りかえ、明治憲法はドイツの翻案、帝国大学は又アメリカ式を止めて、ドイツ式一辺倒となり、お雇教師のケーブルが、ヨーロッパ近代語で正しいランゲージはドイツ語だけ、他の諸国語はダイヤレクト（地方語）に過ぎぬと講義したので、ドイツ語と言えばなんだか一段と高いもののような妄想まで生じた。レクラム文庫の影響をのぞいて明治文化の形成は考えられない。

細流のなかの主なるものは、ツルゲエネフ、ドストエフスキー、トルストイ三尊小説家のロシア、ストリンドベリヒ、イブセンのスエーデン、ノールウエイ、アンデルセンいや今日ではコペンハーゲン学風として原子物理学の世界の父と仰がれたニールス・ボーアのデンマークを擁した北欧、それからダンテの神曲に百花繚乱のルネッサンスを満開させたヒューマニズム本番のイタリー、セルヴァンテスのスペイン、日本を最初に偉大な国民詩に歌いこんだカモエノスのポルトガル、乃木大将と詩的交驍をした女王詩人のカルメン・シルヴァのいたルーマニヤなどのラテン系諸国から、日本に共通するアジア人の群りいるハンガリヤ、それから或る西洋人の紀行にトルコ語の文典を丸善で買ったという記述も見えるから、あの半日旗下のトルコから、南米、蒙古の本まで輸入した。まさに東西

文化の湊合は、丸善楼上で、世界的大合奏を実現した盛観がある。

二 丸善前半史の起伏

日本は、国民皆教育を宣明した明治初年にはアメリカの影響が主になり、明治初年の実利思想は主としてイギリス、自由民権運動の指導原理はルッソーの「民約論」でフランス、憲法はビスマルクに指導を仰いでドイツ、日英同盟でロシアと決戦する腹をきめ、その大勝の結果、世界の一等国の列伍に入ったのだから、再びイギリス的影響という文化的大段階を踏んで日本は発展し、丸善はそれらの状態と形影相副うて繁昌した。資本主義には不可避の疫病といわれる財界パニックの煽りで、一度は、中軸の丸家銀行が倒壊し、十余の枝葉会社はバタバタと将棋倒しになって、脊柱の書籍・洋品部が辛うじて孤塁を守る悲境にも陥入った事はあるが、当事者の好処置で命脈をもちこたえ、また芽を吹き返すには十余年の努力を要した。

たまたま、そうした立直りの完成が、日露戦争と合期し、いうところの十九世紀の諸思潮が奔濤として流入する Sturm und Drang には、まさにその受入れの中心をなし、実に日本のモダーニズムは丸善が broadcasting の中心をなした。(田山花袋の「東京の三十年」参照) 日本の近代化は丸善をくぐってなされたということ、決して自画自賛ではない。

第一次大戦は、神武景氣といわれた黄金の雨に、わが財界は肇国以来の富の総和の倍にも増大し、丸善も亦、その余沢で、ここに盤石の基礎を築いたから、関東大震災に本社は丸焼けとなっても、その復興にさしたる困難を覚

えなかった。

このあたりまでを丸善の前期の歴史として、そのあいだ創立者で初代社長の早矢仕有的から二代松下鉄三郎、三代小柳津要人、四代中村重久、五代山崎信興、六代金沢末吉、七代荒川実と交替した。いずれも有為有能の一代の商傑、業界のサムライであった。但し、外様の内田魯庵が、一世にきこえた博識と多趣味をもって、外の世間に對して、内田の丸善の觀をなした時代があることはあった。

三 丸善後半期の歩み

ここに後半五十年の歴史を大観するに當って先ず夏目漱石の「滿韓ところく」の書き出しを思出して貰いたい。「南滿洲鐵道って一体何をするんだいと真面目に聞いたたら、滿鉄の總裁も少し呆れた顔をして、御前もよっぽど馬鹿だなあと言った。」

南滿洲鐵道すなわち滿鉄は、日本がボーツマス談判でロシアから獲得した諸權益の中の「目玉」である。明治時代それを知らない者はなかった。しかしその滿鉄が何をする所だと聞き直って問われれば、はっきり答は出来ない。それは現に滿鉄の社員でもそう言っていた。

これと似た話がある。丸善に來た客の一人をハイヤー会社の車で送ったところ、その運転手が客に向って、「丸善て何をする所なのですか」と聞いたのである。毎日のように用命によって、この社の客を送迎してしながら、彼には丸善が何をしている所か判断がつかないのだ。しかし丸善三千の社員だって、こういう問に對し、即座

に返事の出来る者が何人おろう。みんな腹の中で分ることは分っているのである。しかし適切に言葉短かに要約できないほど業務が繁多に雑多に、いわば南洋のジャングルの如く、からみ合い、もつれ合つて広がっているのである。という事は、丸善はもはや、昔日の、つまり終戦前の丸善ではないのだ。洋書が心臓であることは、終始一貫していても、経済的には、文具・事務機械・洋品及び枝葉の子会社に歳入で追いつかれ、危機をそれによって切りぬけたことも一再でない。そういう状況ではあつても、洋書を主軸とせずして何の丸善の存在ぞ！ さればこの方針は、如何なる起伏変動に遭遇しても、泰山の重きを以て、不動不易である。

それを動揺させて、分枝会社の援助を仰がねばならぬ場合というのは、多く丸善内部の経営から生じた自律的なものより、世の大勢に煽られた他律的な場合が多い。その一番見易いのは、後半の五十年に差しかかつて起つた日華事変以降である。南京占領あたりまでは連戦連勝で景気がよさそうだったが、日本が得意とするのは連戦即決で、もし相手がそれに乗らず、四つに組んでくると、何しろ中国は四百余州といわれた大国である。じりじりと物資が窮乏を告げ、台湾製糖会社は健在でも、砂糖が不足してきて、子供たちが不満を訴え、紡績はランカシャーを凌いで世界一と呼号していたが、木綿の不足に主婦連が目の色をかえて買だめを急ぎ、在外資本は日にとける雪だるまの如く、目盛りした。

政府と軍は早くから目にして、海外書籍の移入を制限した。これは明治維新の丸善の創業以来、いまだ嘗てないことである。先進国として欧米崇拜の日本は、文明向上の源泉と尊重視して、洋書の輸入を制限した前例がない。日露戦争の戦費捻出には、小学生の飴玉代にまで目をつけ、貯金台紙と称して、五厘一銭の金まで吸収し、その

切手を台紙に貼らせる方法を全国小学校に施行した。その場合でも洋書の輸入を制限すれば、それだけ新知識が途絶するとして、慎重にそれを避けて来たのである。

しかし日華事変の中期からは、この鉄則を破って、産業を主とし極めて特殊なもので政府の許可をうけたものではない限り、海外註文が許されなくなった。日本は孔子崇拜で、国民の金科玉条とする教育勅語も、その仏教道徳の個条書きであるのに、カール・クローの大著“Muster Kun”（孔夫子）まで、日本では入手できず、従軍記者が上海の書店で見つけて争うて買い求めた始末であった。中国共産党の事情を明細にしたエドガー・スノーの「アジアの烽火」は、必要として外務省は秘密裡に翻訳までしているのに、民間では輸入禁書だった。敵を知り、己れを知れば百戦危うからずの有名な孫子の兵法に陸軍からして背くのだから、勝てる筈がない。さすがに輿論は黙っておらず、禁書の前例の特別記事を作って、これ亡国の前兆なりとの警鐘を鳴らしたが、これも政府にとっては馬の耳に念仏だった。

そうした洋書の欠乏に際しても丸善は使命を忘れず欧文古書を蒐めて店頭を埋め、さらに近代東洋知識の無尽蔵の宝庫といわるる“Chinese Repository”（支那叢報）その他の複製本を作って、江湖の要望に応えるなどの窮余手段を講じて、細々たりながらも、洋書本位の面目保持に努めたが、遂に太平洋戦争の万波重畳の中に飛びこみ、末期には日本橋の本社も戦火を浴びて全焼するに到った。終戦を迎えてもほとんど無に還った丸善に復興の力を求めるのは、木に拠って魚を求めるよりも至難であった。

しかし丸善は一切を失ったように見えてもそれは有形のことで、じつはひとつ残ったものがある。それは半世紀

以上、日本文化の推進力の主役をつとめたという歴史と、久しく海外市場に扶植した信用とである。もっともこの無形の物を踏んまえて、丸善を復興するには、これまでの丸善とは、全く違った型の人物が、新たな社長として要求される。篤実温行の士魂商才だけでは足らず、算盤のわかる以外に、風雲を揆測して蹶起する猪突猛進型の人物でなくてはならない。幸いにして丸善では、早くからこの変り種子の社員が養成せられていた。それが第八代社長の司忠である。ただし彼のやや異常と思われる才能の、拠って来る源緒については一考の要がある。司というのは世に又とない珍しい苗字である。伊勢神宮の神領の司をつとめ、その役がそのまま姓となったので、千何百年の伝統があり大名並の官位と爵禄をもつ名家だった。その司家も明治維新の世変で、一朝にして特権を失い、彼が生れ、育ったころは、微禄して、父は小学校の校長であった。元より農村としては生活に困ることはないが、中学以上の教育には事を欠く。司は、自ら学歴なきをひけ目としないどころか、自らを誇っている通り小学校しか出ていない。しかし彼は父が教育家であったから、その点是他の群童以上の配慮の下に育ち、英語など小学校のカリキュラムにはなかったのだが、かつての父の門下から手ほどきを受けていて、丸善に入ってからいささか他にぬきんでた教養を積んでいた。

四 次の一世紀への願い

今の丸善の業績は複雑多面である。だから「丸善で、いったい、何をする所なのか」との疑問も起るのは当然である。書籍部を中心とすることは、たとえ社長の代が替ろうとも、微塵もかわらぬ不動の信条である。しかし一見したところは百貨店の様相を呈して来ている。この点について、司社長は、こう明言していた。

ところで、わが社のことを百貨店と誤解しておられる向きもあるので、店の性格についてちょっと述べておきたい。うちは世間でいう百貨店とは性格はまったくちがう。現在の日本のデパートは、品物を問屋から入れているいわゆる取次販売だが、私どもは純然たる専門店である。だいたい、うちの名前のはいったものは、洋品、雑貨、メリヤスにしても、すべて糸から織り出して売っているという自家製品なのだ。デパートの行き方では特徴のある製品はできないが、丸善にはそれができる。店独自の創作品を出してお客様に満足していただくのが特徴であり、強味でもある。デパートと共存するゆえんである。いい品物を適正な価格で売り、私のほうにも利潤をもらうというのが理想である。

高島屋あり、白木屋あり、三越あって大丸があるという、まるでデパートの渦にはまり込んでしまった形の丸善が、今日どうにかやっていけるのは、うちが徹底して専門店としての方針を堅持しているからだと思う。これからもあくまでもこの特色を貫くとともに、内外の図書・文房具・衣料品・雑貨・事務機など各部門の商品をさらに充実して、それぞれ徹底的に専門店化していくことを基本方針としている。

最後にここで、仮りに丸善を牡丹の花にたとえんとする。中心をなす洋書部は、元より葦である。花が単弁の間は、黄金色の的礫と輝いて何人も見あやまる事はない。それが園丁の工夫で、八重咲きに代ると、群がる花弁に掩われて葦は隠れる。丸善の前半は単弁の花で、後半は八重咲きに代ったといえよう。これを交種させた園丁が司忠ということになる。

彼は自伝の一節に「女の三越、男の丸善」と、明治の末年にはやった言葉をひいた。そこで三越と丸善との差異について彼の言いのこした一番著しい特徴を考えて見よう。

三越は、もともと三井呉服店の名があり、三井は「フォチューン誌」の掲げる毎年の世界の大金持番付でも、いつも上位を占めている一大財閥で、その仕事の芽生えは呉服店であり、創業の歴史は足利末期にまで遡り、ロスチャイルド家より数年古いというのだし、元禄時代には、もう、江戸に聞えた有名呉服店で、その繁栄は西鶴の小説の中にも書かれており

越後屋に絹裂く音や衣更え

という有名な其角の句もある。三井家はもと越後守を名乗った小大名の出であるから、それを店名に用いていた。ロスチャイルドが大をなしたのは初めヘッセン家の用をつとめ、ナポレオン戦争にはイギリス政府に賭けて金融をまかなうという方式で、しだいに大をなした。これが昔の大商人の伸びる基本的形式であった。

丸善は、それに比して、福沢精神の「天は人の上に人を作らず……」を捧じて、天上天下独立独歩である。顧客に知識階級が多いだけに、もし之を失ったら、その時は丸善が天下の信に背いて、見捨てられる時であろう。

丸善はこの百年を一区切りとして、次の歩程を踏み出すのだが、将来に問題は無いかと言えば、もちろん山程あり、特に古い馴染の得意先からは、競争者（わるく言えば商売仇）の出現にたいする備えをすべき点について、よく注意や勧告をうける。しかし類似の同業者のふえるのは自然の勢いで、日進月歩の全日本の洋書需要を、とうてい丸善一社でカヴァーできるものではない。だから古く明治時代から中西屋があって、丸善に次ぐ洋書店として見られていたが、途中で丸善が収容することになった。また昭和から終戦後になって三越、白木屋、高島屋などの百貨店でも洋書部を設けたことがあるが、いつの間にか廃止せられた。その理由はきいても見ないが、洋書の販売は、極めて薄利な上に、まことに繁雑な手のかかるものだから、いわゆる商売にならなかったのではないか。その点丸善は歴史が古いだけに、どの書はどのルートを通せば、一番利益があって簡便であるかが分っているので、いくらか他社より有利な地位に立つ。丸善が八十余万冊の書籍を包蔵し、また聚散させて、かつて来館した日本文化研究のサンソム博士夫人をして、世界的な *Magnificent bookstore* と驚嘆させた規模をもつ背景の力は、この歴史の累積、百年の年輪のいたすところである。

キリスト教関係書の教文館、ソ連書輸入元のナウカ社、多く近代文化書を主とする紀伊国屋書店などの繁昌は、専門書の取扱いが成功の基になっているので、丸善が一般的に広いのと、互に相補って、今後お互に、日本文化の進展に貢献してゆくことを心願したい。